芝浦工業大学　工学部　建築工学科
2001年度卒業研究梗概集 K01- 48

大阪泉南地方の伝統的民家の変遷に関する研究

k98081　堀口智子

1　研究の概要

1－1　研究の目的

大阪泉南地方には昔ながらの大規模な古民家が多く存在することで名高い。住居とは人々の生活に密接な関係を持つものであり、その形態は時代の流れとともに変化し続けている。本研究は文化的にも建築的にも貴重な伝統的住居を年代別に選び、実測調査、及び増改築の痕跡や家相図を基に建設当初の民家を復原することで、民家の構造・平面形式の変遷を解明することを目的とする。

1－2　研究の方法

①岸和田市稲葉町２軒、泉南郡熊取町２軒のそれぞれ建設年代の違う民家に協力をいただき、実測調査を実施した。各々の建設年代は表１に示す通り、それぞれの時代を代表する民家である。

②調査した野帳図を基に CAD にて清書する。

③4 棟の現状図面を材痕跡、家相図等史資料、及び聞取りによる増改築の経緯を基として復原を行う。

④それぞれの民家に関する構造・平面形式の変遷を時系列に沿って把握する。

⑤以上、その時代の民家がどのような平面形式であったかを分析して系統づけ、その変遷と近代に至る形成過程を明らかにする。

1－3　熊取町の歴史

熊取町の歴史は古く、縄文時代まで遡る事ができる。古墳も幾つか残っており、太古からこの地域が人々の営みの場所として使用されていた事がわかる。江戸時代には綿栽培を始め、紡績業で発展した。この地域には中家、降井家という中世からの豪農がおり、大久保・小垣内・小谷・五門・野田・紺屋・七山・久保の八ヶ所の字に分かれる、塊村及び街村集落である。

1－4　岸和田市の歴史

熊取町と同じく、古くから栄えてきたこの街は府の南部、泉州の中心部に位置する。岸和田城下は江戸時代に岡部藩の城下町として栄え、明治末より紡績業を中心に商工業が発展した。調査した稲葉地区は、岸和田城下より内陸へ約 5km 南東にあり、江戸時代には小泉藩の飛び地であった。
熊取町同様、良質の水に恵まれたため、紡績業の他に醸造業が繁栄した。

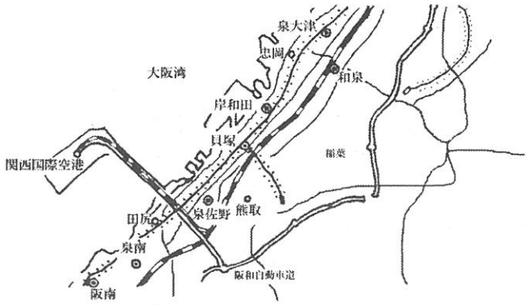

図１　調査地対象地域

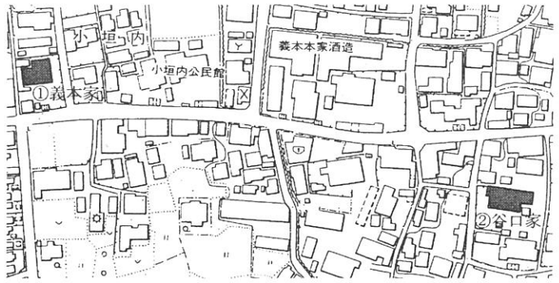

図２　義本家分家(①)・谷口家(②)周辺地図

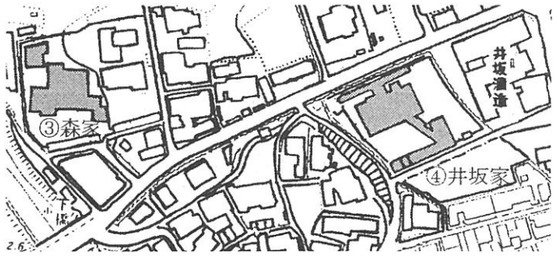

図３　森家(③)・井坂家(④)周辺地図

表１　調査対象家屋一覧

番号	住宅世帯主名	屋号	建設年代	建設年代根拠	調査図面				
					1階平面	梁行断面	配置	復原	架構
1	森三良	万松園	江戸後期(1800)	瓦笹字	○	○	○	○	○
2	井坂佳嗣	井坂酒造	明治初年(1870頃)	家相図	○	○	○	○	○
3	谷口俊雄	—	大正 11 年(1921)	聞取り	○	○	○	○	○
4	義本元彦	酒義本回正堂	昭和 7 年(1932)	聞取り	○	○	○	○	○

指導教員名　伊藤洋子教授

2　調査対象各戸解説復原平面

2－1　森家（稲葉町）

建設年代は屋根の鬼瓦側面に笹字で寛政 12 年と記してあり、構造など主な特徴は、石場立・土壁・折置組（土間部分）が挙げられる。葦葺の小屋組は束（オダチ）で補強した扠首組である。

森家は屋号を「万松園」と呼ぶ。由来は建築材料に松を多く使ったことから付いた。母屋と離れが接続しており、離れが４室、母屋が６室の構造である。屋敷は非常に広大で貴重な近世の民家と言える。特に一般の民家で滅多に見ることがない長屋門が印象的である。ただし、離れは親戚が集まるときに客間として使用されていたが、現在は使われておらず、傷みが激しい。

写真１　森家母屋正面

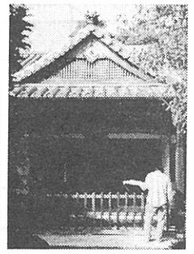

写真２　森家式台

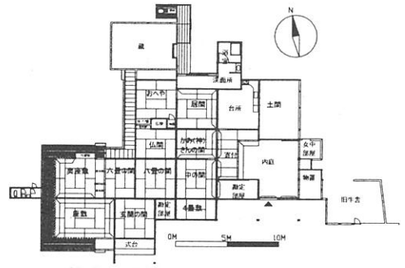

図４　森家平面図

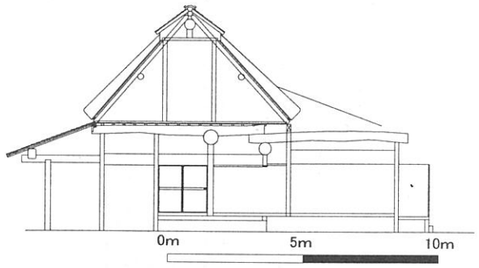

図５　森家断面図

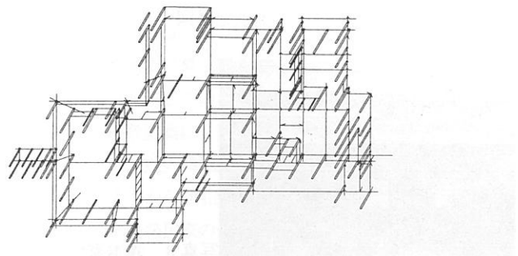

図６　森家架構図（軸部）

2－2　井坂家（稲葉町）

井坂家は古くから酒造業を営むこの地方の名家である。主な構造の特徴は、石場立・和小屋と登り梁を併用する小屋組、落ち屋根付きの瓦屋根などである。平面はこの地方独特の巨大民家で田の字型の変形版である。今回の調査では昔の改築のたびに作られてきた家相図がほぼ完全な形で残っていた。これにより、より詳しい変遷の様子を明らかにした。

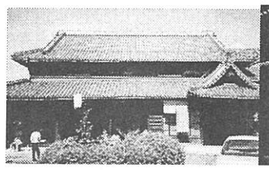

写真３　井坂家正面１

写真４　井坂家正面２

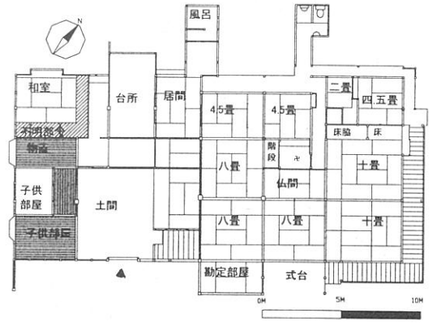

図７　井坂家平面図　（室名は大正家相図より）

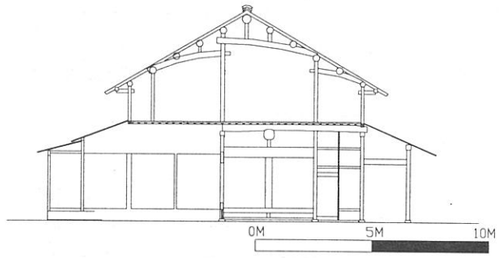

図８　井坂家断面図

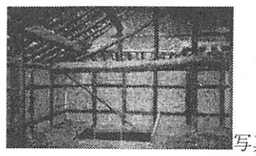

写真５　井坂家小屋裏

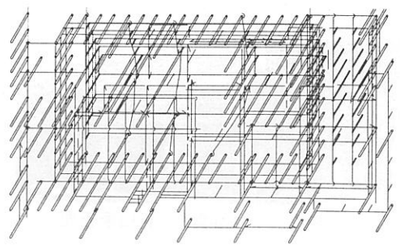

図９　井坂家架構図

2－3　谷口家　（熊取町）

谷口家は大正11年の建築である。小屋組は土間上で和小屋、居室上で束立（オダチ）により補強した登り梁である。17世紀中期から見られる典型的な田の字型住居に、今は使われていない巨大な納屋が付設している。

谷口家の大きな特徴として2重になっている床が挙げられる。そのため床はGLから800mmと、とても高くなっている。大きな改築は子供部屋の増築1回のみで、保存状態は良好である。

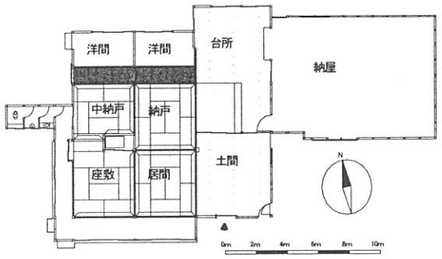

図10　谷口家平面図

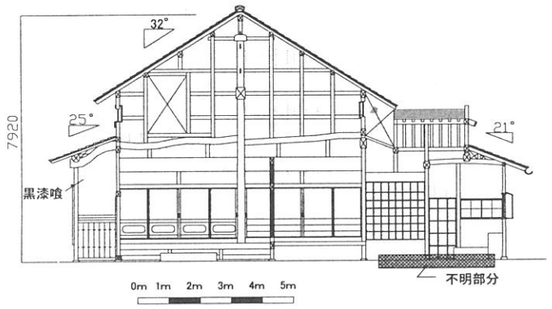

図11　谷口家断面図

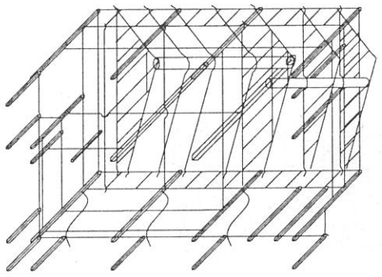

図12　谷口家架構図

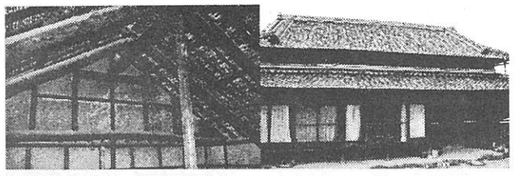

写真6　谷口家小屋組

写真7　谷口家正面

2－4　義本家分家　（熊取町）

義本分家は昭和初期の建築であるが、基礎は土台を欠き、石場立である。また、小屋組は谷口家と同じく土間上で和小屋、居室上で束立により補強した登り梁である。太く、立派な梁が印象的で全体の構造は谷口家と酷似している。ただし、義本家と谷口家の間取りは反転している。

義本家は本家、分家ともに酒造業を営む家である。今回調査したのは分家の住居である。本家の住居は近年取り壊し、建て替えが行われたため調査対象にならなかった。

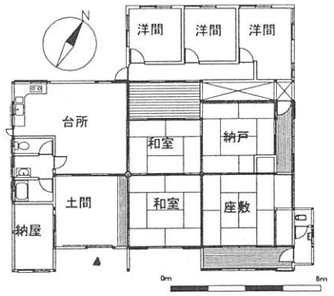

図13　義本家平面図

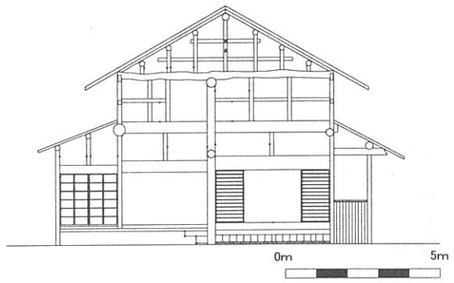

図14　義本家断面図

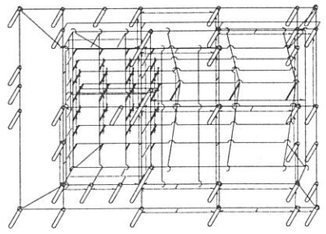

図15　義本家架構図

写真8　義本家分家正面

3　民家平面の変遷について

調査した4棟の平面復原図に、中家の建設当初復原図面と中古図面、井坂家の前身建物図面を加えて表2を作成し、泉南地方における平面形式が江戸初期～昭和初期までの間にどのように変化したのかを探る。さらに架構・屋根形状を含めた編年表を作成し、表3に示す。

表2　各戸の平面の変遷

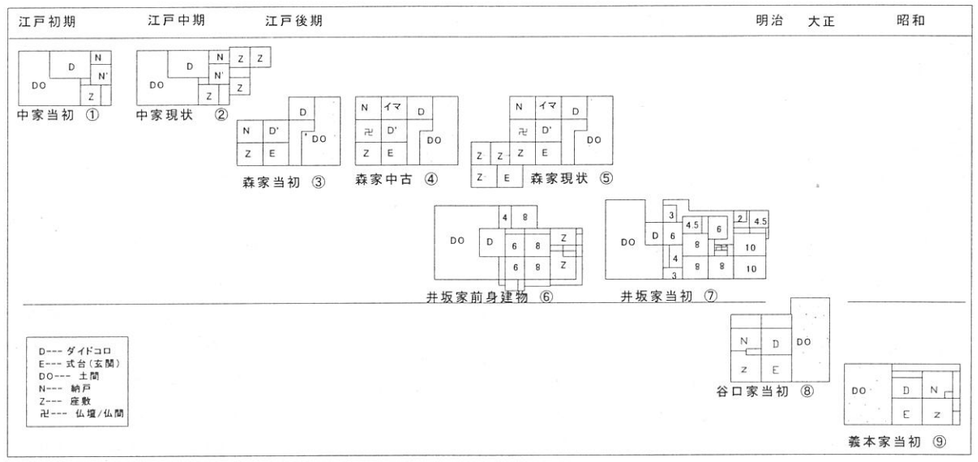

表3　各戸の編年一覧表

番号	屋号	主屋規模	架構		柱間寸法		屋根		ダイドコロの位置		主入口		座敷部付設	仏間有り	仏間備考	基本平面類型
		桁と梁(間)	類型	梁の種類	桁	梁	茅葺含	瓦	土間に突出	非突出	妻側	平側				
1	中家当初	10X9	束立扠首	牛梁	1991	2015	○	－	○	－	○	－	－			喰違三間取り（前座敷型）
2	中家現状	10X9	束立扠首	牛梁	1998	2000	○	－	○	－	○	－	－			
3	森家当初	8X6	束立扠首		—	—	○	－	○	－	－	○	○	－		整形四間取り
4	森家中古	—	束立扠首		—	—	○	－	○	－	－	○	－	○		
5	森家現状	8.5x6.5	束立扠首		1840	1900	○	－	○	－	－	○	－	○		
6	井坂家前身	11x7	——	登り梁	—	—	－	○	○	－	－	○	○	△	表座敷に仏壇	整形四間取り
7	井坂家当初	13X7	和小屋	登り梁	1868	1822	－	○	○	－	－	○	○	○		大規模複合型
8	谷口家	7X6	和小屋	登り梁	1850	1840	－	○	－	○	－	○	－	－		整形四間取り
9	義本家	7.5X5	和小屋	登り梁	1884	1884	－	○	－	○	－	○	－	－		整形四間取り

4　結論

江戸初期の平面構成の三つの特徴は、表2の中家(①)の中古図面に見られるⅠ、主な入口は妻側にあった。Ⅱ、喰い違い三間取りである。Ⅲ、ﾀﾞｲﾄﾞｺﾛは土間に突出している。である。これが1800年（18世紀末）には森家の当初復原図(③)に見るように整形四間取りが成立する。そして近代に入ると⑧⑨に見られるように塊村化、街村化の進む熊取・稲葉地区の一般住宅に採用されたと考えられる。

大庄屋階級の中家、森家、井坂家では座敷列の付設による住宅規模の増大を図る様になっていった。その結果、森家、井坂家は部屋に余裕が生じ、仏間を独立して持つ事が可能となった。森家は増築により、井坂家は明治初年の新築により、それを成し遂げている。この2棟に共通するものは、梁間奥へ三室目を持っている事である。三室目の増設は森家では幕末期と推定され、井坂家では文久年間で既に奥への三室目を持っている。一方、江戸初期の建物である中家当初平面は前面座敷の奥に二室の納戸を有しており、梁間のある大庄屋階級では、かなり古い時期から奥行き三室となる要素があったと推察される。表2から、明治初年に完成した井坂家の平面形式はこの地方の大庄屋階級民家の最発展系であり、ひとつの完成に至った姿であると理解される。

しかしながら整形四間取りを基本とする主屋コアの平面形式は、近代に入って建築された谷口家(⑧)義本家(⑨)の両家ともに引き継がれ、中家、森家、井坂家といった大庄屋階級の平面の基本は、近代の中規模農家に継承されたと考える事ができる。

構造上の特徴は、全ての民家は石場立てであり、これはこの地域が湿地帯であったことと関連していると考えられる。次に小屋組において森家(④)では折置組・扠首組に束立を併用し、座敷列部分には和小屋を用いている。井坂家(⑦)は、登り梁を用い、森家同様座敷列部分には、和小屋を用いている。谷口家(⑧)・義本家(⑨)はともに、居室部上はツシとして利用するために登り梁を用いて、土間部分には和小屋が用いられている。つまり、座敷列部分の架構形式であった和小屋が近代に土間部分に用いられるようになったことはこの地方の一つの特徴といえる。

参考文献　「熊取町史」本文編　「近畿の民家」林野全考著
「藩史大事典」第5巻　「江戸幕藩大名事典」
「日本列島民家史」宮澤智士著
「日本民家史」藤田元春著　「岸和田市史」第3巻